

報告書

コーディネータ：佐藤重一、原田めぐみ、通訳：久我紀美

受入期間：2026年1月14日（水曜日）～1月21日（水曜日）

受入団体：南太平洋大学グループ 秋田コース（トンガ・ツバル・ニウエ）

受入人数：21名（学生男性7名、女性11名、SV男性1名、女性2名）

1. 総括

本コースは、国指定重要無形民俗文化財の指定件数日本一である秋田県を訪問し、伝統的な歴史や伝承・文化、地域資源を生かした持続可能な観光開発手法について、県施設の訪問や行政・観光地域づくり法人（DMO 法人）等との意見交換、農泊体験を通じて学ぶことを狙いとした。

秋田県では、秋田県庁にて県内観光資源について学び、その後、なまはげ館、三吉梵天祭を視察し、秋田芸術村では伝統芸能祭を体験した。同県の東部中央に位置する仙北市ではグリーンツーリズムにかかる講義や農泊を行った。農泊先では、秋田名物のきりたんぼの調理を行うなど学生にとっては大変、貴重な体験となり、早速、農泊日数を増やしてほしいなどの要望もあった。

東京都内では、皇居および浅草散策、スカイツリーや日本未来館を視察し、伝統文化と先端技術が共存している日本に非常に強い関心を抱いた様子であった。また、國學院大學観光学科との学生交流を行った。同年代の学生と意見交換することで、お互いの国の良さを理解するきっかけになった。

プログラム全体を通じ、大洋州からの参加者による本事業に対する評価は極めて高かった。

2. 訪問先記録

日時	視察先
1月14日(水) 9:30～12:50	【日本文化】商業参観（空港ユニクロ）、スカイツリー（車窓）、皇居散策 本コースの視察先が秋田県（1月の平均気温が－2℃から2℃）であり、視察時期は大雪の予報が出されている為、成田空港到着後、防寒着を必要とする学生のために商業参観を設定した。また、両替が必要な学生は、この時間を利用して空港で両替を行った。 成田空港から東京都内へのバス移動中は、各通過地点（スカイツリー、ディズニーランド、遠くに見えた富士山など）について、バスに同乗する通訳3名による観光ガイドが行われた。これらは学生に参考になったと思われる。ただ、車窓から見たスカイツリーの塔の高さが634メートルと紹介されたが、学生は今一つイメージが難しいようであった。日本到着が早朝であったため、疲れている学生もいた。 皇居では、楠木正成像から二重橋までのルートを散策し、通訳より皇居について丁寧な紹介がされた。

	 ▲皇居二重橋前
1月14日(水) 13:45～16:45	【オリエンテーション】代々木オリンピックセンター 外務省大洋州課上席より歓迎の言葉があり、学生は真剣に聞いていた。学生たちは、今回の訪日が各国の代表として来ていることを再認識した様子であった。 その後、全体オリエンテーションおよび各コースに分かれてブリーフィングを行った。コース別ブリーフィングでは、今回の視察の目的の確認や実施項目などについて再確認を行い、大学交流や研修後の報告会の発表者等について打ち合わせを行った。 なお、オリンピックセンターでの昼食で、当初予定していたレストランで食物アレルギー対応可能なメニューが売り切れていたため、日本旅行担当者が、直ぐに、隣にあるレストランで食事を取る手配をして頂いた。
1月15日(木) 9:30～10:30	【日本文化】浅草観光 雷門前にて、通訳より雷門や浅草寺に関する説明を行い、その後は集合時間まで自由散策を行った。学生は、仲見世でお土産を買ったり、食べ物を買ったりする写真を撮り情報発信の準備をしていた。希望者には、通訳者が雷門から本堂までを案内した。 学生は、雷門の大きな赤い提灯の底に刻まれている立派な龍の彫刻に感動したり、香炉ではそのご利益を信じて煙を浴びたりしていた。また、本堂では、天井の龍や天女の絵を見て、お寺（仏教）と神社（神道）とはお参りの仕方も違う事を学んだ。浅草寺は、お寺と神社が共存する、今では珍しい場所だという説明にも大きく頷いていた。  ▲浅草寺雷門前
1月15日(木) 14:05～15:50	【移動】東京・羽田空港→秋田空港 航空機の離陸直後、機内アナウンスで同便が「大雪のために秋田空港に着陸できない場合は、羽田空港へ引き返す可能性がある」条件付きフライトであることが伝えられ、学生たちは特に動揺は無いものの、驚いていた。 秋田空港の除雪作業の為、着陸が約30分遅れたものの無事に着陸することが出

	来き、皆、ほっとしていた。 空港ロビーから出てたところで、初めての雪（大雪）に接し、皆、大喜びであった。彼らにとっては大変、貴重な経験である。   ▲秋田空港到着時 ▲トンガ学生 ホテル到着後、コンビニに行きたい学生については、早い時間（20 時頃）にコーディネーターが同行して、単独行動にならないよう 8 名～10 名程度で移動した。
1 月 16 日 (金) 9:45～11:00	【観光資源】 秋田県庁 観光文化スポーツ部表敬 秋田県の観光資源について、なまはげや秋田犬などの文化、美しい自然、乳頭温泉などの温泉郷、きりたんぼなどの郷土料理等について丁寧な講義があった。 とても和やかな雰囲気で行ったお陰で、質疑応答では学生達が活発に質問をしていた。例えば「(講師が) 小さいかった時、はなまはげは怖かったか」など素朴な質問も出され、講師の方には丁寧に回答を頂いた。また、「秋田犬、持って帰っていいですか?」という質問については、「秋田犬は成犬はかなり大きくなるけど、君はガタイがいいから、大丈夫! いいよ」と言われて笑いを誘っていた。 昨今の文化の違いに関する質問に対しては、昔はなまはげは地域の各家を訪問していたが、最近は事前に訪問の要望を確認し、要望がある家のみに行くようになり、個人の意見を尊重するなど時代に伴い活動が変化していることも紹介された。 講師の方は「なまはげは、子供の頃から体験していて、常に身近にあるもので、その頃は、どうしてこんなことをするんだろう…」という感じで捉えていたが、大人になって、その意味がわかるようになり、そして、今や、ユネスコ無形文化遺産に登録されるまでになったことが紹介された。 併せて、「皆さんの国にも独自のユニークな文化、伝統があると思う。皆さんが、今、自分の周りで当たり前と思っていること、それをどうぞ発信してください。そうして身近にあるものが、周りの人に共有して知ってもらうことでこのなまはげのような文化遺産になることもある・・・ということを知ってほしい」との言葉に、生徒達は真剣な眼差しで聞き入っていた。

	  ▲県庁プレゼンテーション ▲県庁庁舎入口なまはげ像前（県庁職員と！）
1月16日(金) 13:30～16:30	【伝承・文化】男鹿総合観光案内所、なまはげ館、男鹿真山伝承館 男鹿総合観光案内所で大きななまはげ像の前で記念撮影を行った。風が本当に寒かった！ なまはげ館ではなまはげの文化・伝承について学び、男鹿真山伝承館ではなまはげ実演を体験した。民家を模した家屋での演劇中に、周囲の壁やふすまがガタガタと揺れるたびに学生たちはドキドキしながらなまはげの出現を待っていた。出てくるとわかっていても、やはり怖いようであった。学生たちは、なまはげが単に怖いだけではなく、家内安全、豊作祈願、子供たちのしつけなどを考慮した重要な伝統文化であることを理解した。   ▲大地にそびえるなまはげ像 ▲伝承館でなまはげの出現を待つ。ドキドキ。 生徒達にとって、なまはげはかなり印象が強いようで、東京で他のグループのUSP スーパーバイザーに秋田の印象を聞かれた時に「なまはげ！」と答え、他グループに「なまはげって何？」と聞かれた時に、意気揚々と説明していた。 映像や資料だけでなく、実際に体験する事によって、より理解を深め印象に残ったようである。
1月17日(土) 10:00-12:00	【地方プログラム】三吉梵天祭 視察 三吉梵天祭は、太平山三吉神社総本宮で年に1度（1日のみ）行われる郷土のお祭りである。学生にとっては、日本の郷土の祭りを見る貴重な機会となった。 梵天が来る度に掛け声とともに、餅、きりたんぽ、ミカンなどが観衆に投げ込まれ、ミカンを取った参加者が皆で分けて食べていた。また、主催者のご厚意で、学生全員にお守りが渡された。 神社が準備した通訳者が、お祭り数日前に雪で転倒して腰を痛め、当日の案内が

	危ぶまれたが、どうにかお祭りに来ていただき、お祭りについて英語で説明をして頂いた。学生は、お祭りもさることながら、雪中の歩行にも注意を払う必要があることを学んだ。  ▲三吉神社総本宮の鳥居前  ▲掴んだミカンを分け合って食べる。
1月17日(土) 15:00-17:00	【地方プログラム】仙北市交流デザイン課、仙北市農山村体験推進協議会（農泊） 仙北市役所では、同市の大きな垂れ幕で多大な歓迎を受けた。 同市交流デザイン課より、角館武家屋敷通り、田沢湖、スキー場、温泉郷など同市が持つ歴史、文化、自然豊かな観光資源について講義をして頂いた。 その後、今回のプログラムの主な活動の一つである農泊の対面式を行った。学生も、受け入れる側も少し戸惑っているようだった。学生は、英語でのコミュニケーションが難しい場合、身振り手振りで自己紹介をしていた。  ▲仙北市の歓迎垂れ幕  ▲記念品交換 南太平洋大学側からの記念品の一つとして、ニウエの学生が日本では絶対に手に入らない貴重なニウエ語／英語辞書を送った。
1月18日(日) 10:00-12:00	【地方プログラム】仙北市交流デザイン課、仙北市農山村体験推進協議会（農泊） 一泊の農泊を終え、ホストファームと一緒に別れ会の会場に来た学生は、楽しそうにホストファームの人たちと会話をしていた。学生は皆、口をそろえて、農泊が貴重な体験であったと述べていた。最初の対面式の時のぎこちなさが嘘のようである。 多くのホームステイ先で一緒にきりたんぼを作ったようで、その作り方も「お米を潰して…」と説明してくれた。きりたんぼを一から作った経験がある人は日本国内にも多くないと考えると、やはり良い経験だったと思う。 恵方巻きを一緒に作って、その意味やその食べ方を学んだ生徒達もいた。

	学生がお礼のパフォーマンスをした後、お別れの時は抱き合っ別れを惜しんでいた。  ▲ツバル国メンバーのダンス  ▲ホストファームとの集合写真
1月18日(日) 12:00-14:45	【伝統芸能祭体験プログラム】秋田芸術村・わらび座 昼食は、秋田の郷土料理のきりたんぽを食べた。学生は、殆ど残さずに食べた。 わらび座公演では、太鼓の練習や観衆がステージにあがって踊るなど、見るだけでなく、観衆を飽きさせずに楽しませる趣向が凝らされており、学生には学ぶ点が多かったと言える。 演劇の出演者から促されると、学生たちがステージに上がり、楽しそうに綱引きや踊りに参加するなど積極的に交流を深めていた。促されたら、尻込みをせず参加するあたりが太平洋州の若者の頼もしさであろう。  ▲郷土料理きりたんぽ  ▲観衆参加の太鼓叩き  ▲公演者との集合写真
1月18日(日) 15:15-18:45	【歴史探訪】角館武家屋敷～夕食 ここでは集合時間を決めて自由散策。  秋田市内へ移動し、夕食。皆、食欲旺盛。お陰で、体調不良者も出ず、元気にプ

	ログラムを継続することが出来た。日本食はおいしい、とのこと。学生にとって、チキンの唐揚げは好評だった。
1月19日(月) 13:00-16:20	【学生交流】國學院大學「たまプラーザキャンパス」 学生交流は、まずグループ・ディスカッションを行った。トンガ、ツバル、ニウエの学生2名ずつの6人のグループを3つ作り、そこに国学院大学の学生3名ずつが入り、1グループ9名で、それぞれの国の観光スポットや生活習慣等について紹介し、意見交換を行った。日本人学生になじみのないニウエはツバルは、まず、自国がどこに位置するのかというところから始まり、生活スタイル、観光スポット等について説明をしていた。お互いの国について理解が深まったものと思われる。その後、茶話会にてさらに交流を深めた。 ▲グループ・ディスカッション ▲茶話会 最後に南太平洋大学側の学生3か国によるパフォーマンスを行った。これは國學院大学の学生及び大学関係者に大好評であった。 ▲トンガ・メンバー ▲ニウエ・メンバー
1月20日(火) 13:30～16:00	【報告会】代々木オリンピックセンター 午前中に各国の報告内容を取りまとめ、午後に各国の報告会を行った。それぞれ、今回の研修で得た気づき、学んだこと、アクションプランを発表した。発表者は、ツバルは代表者1名が発表し、トンガとニウエは参加者全員が発表した。このあた

	りは、SVの視点の違いだと思われる。トンガとニウエのSVは教師であり、できるだけ各学生に発表する機会を与えようと考え、USP 大学ツバルキャンパスのアドミニストレーション担当であるツバルのSVは、発表を一人に任せた方が良いと考えたものと思われる。
1月20日(火) 16:30～20:30	【秋葉原散策とお別れ会】 秋葉原散策は、集合時間と集合場所を決め、自由行動とした。体調が悪い女子学生が集合時間に遅れたが、その後のホテルでのお別れ会では体調は戻っていた。 ホテルのお別れ会では多くの学生からJENESYS事業に参加できたことへの謝意が述べられた。
1月21日(水)	【帰国】 ニウエ参加者：午前に出発。   ▲ホテル出発 ▲成田空港 セキュリティゲート通過 トンガ、ツバル参加者：午後のフライトであるため、午前中は日本未来館を視察した。

3. 改善点

項目	指摘
アレルギー等	アレルギー等については、人選時やプレ・プログラム等で事前に確認していたものの、本邦到着後に確認した際に申告してくる学生がいた。食物アレルギー等は人命にかかわるため、今後は事前ヒアリングにて聞き取りの精度を上げることと繰り返し確認する必要があることを実感した。 また、アレルギー以外に、ホテルの低層階ルーム希望者がいることが日本到着後に分かり、旅行代理店に対応をお願いした。このようにアレルギー以外で特別な対応が必要な場合も事前に把握するよう質問の項目を追加する必要があることが分かった。

	た。 併せて、各種情報が入り次第、旅行代理店やホームステイ先に伝えることを今後 も徹底したい。
農泊日数	学生から農泊の日数を増やしてほしい旨、要望があった。今回は、1泊のみであ ったが、多くの学生が農泊が有益であり、学ぶことが多かったという指摘があること から、次回はファームステイあるいはホームステイを2泊にすることも前向きに検討 することが必要と考える。
ネームカード	配布したネームカードに、大きくニックネームが記載されていると、農泊や学生 交流の際に、名前を呼びやすかったかもしれない。
コンセント	今回、パソコンを持参した者の内、日本のコンセントに対応するプラグを持参し ていないものが3名おり、そのことが秋田への移動後に判明した。コーディネーター とSVが、研修プログラム終了後に家電量販店に行き、対応プラグを見つけて購入し た。 東京出発前であれば、該当プラグは空港や量販店で比較的容易に見つけることが でき、プラグが無くパソコン作業できないという状況を避けられる。このため、本邦 到着後、早い時期に困りごとが無いか確認することも有効と考える。また、コンセ ントの形状は、しおりでの説明だけではなく、口頭で伝えるとなお良い。
空き時間の活用	活動日程を細かく設定していたが、食事や施設訪問の自由行動の後、どうしても 時間が空く場合があり、学生が時間を持て余す場面があった。これについて、コーデ ィネーターより「ちょっとした空き時間に、その場で気軽にできる日本の遊びなどお 伝えしたらよかったな～」との意見があった。 なお、秋田空港では、通訳の方が持参されていた折り紙をレクチャーしておられ た。素晴らしい！。また、コーディネーターの一人は水引（ひきみず）を持参してい た。
交通手段	今回、秋田コースは飛行機とバスでの移動であった。もし、機会があれば、新幹 線や地下鉄に乗ることも進めたい。新幹線の速さだけでなく、定時で運行されてい ること、列車が乗客昇降口で正確に停止する点など、日本人がきめ細かいサービスを見 てもらう機会になると考える。但し、今回の秋田コースのように20人規模で移動す る場合は、対応は難しいかもしれない。

4. 感想

まずは、今回のJENESYS秋田コースが大きなトラブルもなく、順調に日程を終えることが出来たのは、訪問先や農泊先の皆様、旅行会社の皆様、日程及び活動を調整頂いた皆様の多大なるご支援のお陰だと存じます。この場を借りて、皆様にお礼を申し上げます。本プログラムに対する参加学生による評価は極めて高いものでした。

今回の秋田コースは、真冬であり大雪警報が出ている最中であったため、暖かい太平洋州から来た参加者は体調を崩すのではないかと心配しておりましたが、これも乗り越し苦労となりホッとしました。

また、秋田県では今年、クマによる人的被害が多かったことから、秋田コースでは秋田到着後に学生に対してクマ鈴を配布しましたが、幸いなことに真冬でクマが冬眠時期であったことから、視察先付近でのクマの出現情報はなく、無事に秋田でのプログラムを終了することが出来ました。

参加した学生は、皆、活動に真面目に取り組んでいました。日本到着時は、緊張と移動の疲れからか大人しい感じがしましたが、時間が経過すると慣れると徐々に元気が出てきました。ただ、最終報告の際に、もう少し大きい声で元気に発表してほしいかったです。

今回、驚いたことの一つは、大型バスへのスーツケースの搬出入を学生たちが手伝っていたことでした。東京でも秋田でも同様でした。時にはバケツリレーの要領でスーツケースをバスへの搬入・搬出をしていました。これは、成田空港到着後に全員（約45人）が都内に向かうために、大量のスーツケースをバスに積み込む際に、徳島コースの通訳の方が大きい声で「Boys, Please help the driver!」と一声かけたのが大きかったと思います。お陰で秋田でもバス移動がスムーズにいきました。

このあたり、日本の学生では、こうは行かないかもしれないと感じました。

次に、学生達に日本の印象を聞いたところ、「日本人はマナーが良くて、親切。」、「ゴミが落ちていない…。」、「通りにゴミ箱が置いていないのに、どうしてゴミが落ちていないのか？」などが出された。また、「全てがうまくきちんと整理整頓、きちんとしている印象がある」、「コンビニに色々な新鮮なものが売っていて、なんでも揃う」などのコメントがありました。また、「秋田で出会った一般の方々にも道を譲ってもらったり、言葉が通じないながらも人の温かさを感じた」ようです。

参加者の中には、もう一度、日本を訪問したい、次は日本に留学したいなどの声が聞こえてきました。また、今回は冬の秋田だったが、次は別の季節に来てみたいとのコメントもあり、確実に日本ファン、秋田ファンが増えたと言えます。

SVは、しっかりと学生とコミュニケーションを取っており、大きな助けになりました。

各視察先からバスに戻った際の人数確認はSVを通じて行い、学生交流等のイベントの内容や方法についてもSVを通じて学生に周知してもらいました。先述の通り、トンガとニウエのSVは教師であるため学生への対応が慣れているようでした。ツバルSVはUSPツバルキャンパスのアドミニストレーターであった為、本邦到着当初は少し学生との距離が有るよう感じました。パフォーマンスの際に、トンガとニウエのSVは学生と一緒にパフォーマンスに参加し、ツバルは参加しなかったのは、このあたりの違いが有ったのかもしれません。どちらが良いというわけではなく、それぞれの方法で対応頂いたと思

います。

トンガの SV が渡航前に急遽変更となりましたが、よく学生をまとめていました。毎日、宿泊先ホテルに戻った後、簡単な当日の振り返りと翌日の活動の打ち合わせをしていました。一度、SV からコーディネーターに対して、当日のトンガ学生について問題となる行動が無かったか、との質問を受けたことがありました。特に問題はない旨、伝えました。真面目なSVとの印象です。

今回の参加者が、将来、日本との友好関係を気付く懸け橋となることを切に望みますし、そう成ってくれるものと信じております。

(了)